

5 - 6 造形活動の指導：創造性を育てるための活動

子どもたちは、自分の思いを絵に表したり、空箱・空容器を利用して自分のイメージを具体化したり、みんなで大きなものを作り上げて遊びをダイナミックに展開したりしていきます。そのような造形活動を通して、発達に即した用具の扱い方や技術、物事に取り組むときの粘り強さを身につけていくとともに、創造性も培われていきます。また、完成したことに満足して、達成感・成就感を得ることができます。

描画

子どもは、1～2歳頃から鉛筆やクレヨンを握ると、線や点、円を描きます。円を描くようになると、目や口などを加えて顔にし、それに手や足を直接描き加えて、体のない人物を描いたりしていきます。また、家のなかが見えて見えるような表現や、花や太陽のなかに目や口を描くこともあります。このような絵の描き方は幼児期の特徴です。園では、鉛筆・クレヨン・ペン・絵の具などを使って、自分が描きたいと思ったときに自由に描いたり、遠足や運動会など経験したことを課題にして描いたり、植物や動物などを観察して描いたりします。このような活動を通して、描く用具の扱い方を身につけ、様々な表現方法を試みながら、のびのびと絵を描くことを楽しみます。

教育的意義

- ・ イメージしたことや感じたことをのびのびと表現することから、想像力や創造力が育つ。
- ・ 描く活動のなかで、様々な色や形の組み合わせの美しさや面白さに触れることで、豊かな感性や感覚が培われる。
- ・ いろいろな画材に触れることを通して、それぞれの特性を知り、扱い方に慣れる。
- ・ 対象を関係づけて配置したり、形や物の大小、遠近関係などを考えて描いたりすることで、空間を認識する力が育つ。
- ・ 自分の思いや感じたことを絵に表わすことで、気持ちが解きほぐされ解放感を味わう。
- ・ 教師は子どもが描いた絵を通して、その子どもの心情を理解することで、その子どもに即したよりよい働きかけができる。
- ・ 同じテーマで、友達と一緒に一枚の大きな紙に描く活動を通して、みんなでやり遂げた達成感や成就感を味わう。

いろいろな描画活動

クレヨンは、子どもにとって親しみやすい画材です。

いつでも好きなときに出してきて、楽しく絵を描くことができます。

絵の具は、のびのびと大きく描くことができ、ダイナミックな表現をしたり、満足感を味わったりすることができます。



描いた絵を切り取って壁面に貼ることで、楽しい雰囲気づくりをしています。

また、切ったり、貼ったりと、はさみや糊の扱い方も身につけていきます。



クレヨンで描いた絵の上に、薄くといた絵の具をぬりました。

クレヨンが絵の具をはじき、思いがけない効果をあげて、いきいきとした絵になりました。



行事を思い出しながら描いた子どもの絵を壁に飾ることで、1つのテーマが生まれ、友達の絵を見ながら経験したことを話し合ったり、それぞれの表現の違いを感じ取ったりしていきます。

テラスに椅子を持ち出して、葉っぱの落ちた木を写生し始めました。

青々としげっていた葉っぱが、この時期には枝だけになってしまったことから、冬が来ることを感じとって、絵に表そうという気持ちが出てきたのでしょうか。



留意点（配慮すること）

- ・ 子どもにとって絵を描くことは、自分の思いや感じたことの出でです。描くものを指示したり、描き方を干渉したりせずに、自由に楽しく行えるようにすることが重要です。
- ・ 鉛筆やクレヨン、筆の持ち方、絵の具の使い方など、うまくできずに、挫折感や抵抗感を感じ、興味を失う子どもも出でできます。絵を描くために必要な技能は、子どもの発達に応じて指導していきましょう。
- ・ 子どもの絵は、大人のような整った表現ではありません。楽しかった経験や観察したもの、描いた時の思いなどをじっくりと聞いて、書き留めておいてあげましょう。
- ・ 絵を描くことには個人差があるので、年齢や、家庭環境、保護者の教育観などを踏まえながら、それぞれの子どもの経験や発達に応じた援助をすることが大切です。
- ・ 絵の材料を自由に使えるようにすることは大切ですが、描いた絵の枚数を競ったり、大きな紙に小さく描いた絵を切り抜いて、周りの紙を捨てたりすることのないように、物を大切に扱うことも知らせていきましょう。
- ・ 限られた大きさの紙にバランスよく描くことは難しいので、はみ出したり、描ききれなかったりした時には、楽しくのびやかに表現できるように紙をつぎ足してあげましょう。

活動の応用またはヒント

- ・ 花や実、貝殻をつぶして色を作り出して、絵の具の代わりに使うこともできます。
- ・ 人や動物、植物などの絵の後ろに棒をつけると、ペープサートとして遊びに使うことができます。
- ・ クレヨンで描いた絵の上に、薄くといた絵の具をぬると（例：クレヨンで魚を描いて、上から水色の絵の具を塗る／星を描いて、上から黒の絵の具をぬるなど）、クレヨンが絵の具をはじく不思議さから、表現の意欲を高めることもできます。
- ・ 薄い皿に綿や布を敷き、絵の具を含ませてスタンプ台を作ります。手や、瓶の底・ふた、木の枝、野菜くずの切り口などを押し、様々な形を楽しむことができます。小さな紙に押ししてカードを作ったり、遊びの小道具（切符やペンダントなど）にしたりすることもできます。
- ・ 切りぬいて余った紙や、雑誌、新聞紙、包装紙などは取っておき、細かくちぎったり、切ったりして貼り絵の材料として使うこともできます。
- ・ 紙がなくても、地面に棒で絵を描いたり、木の枝や葉などを組み合わせて、立体的でダイナミックな作品を作り上げることもできます。

製作

子どもたちは様々なかたちで自分の思いや考えを表しますが、その表現方法のひとつに、空き箱や空き容器、不要になったものなどの素材を利用して、自分の思いや考えを表わす「製作(ものづくり)」があります。完成した作品にも意味がありますが、何よりも身のまわりにある様々な素材・材料を使って、想像力や創造力を発揮しながら製作に取り組むことに大きな価値があります。その過程で、切ったり貼ったりつなげたりしながら、色や材質、形状など、素材のもつ面白さや美しさを知り、色彩感覚やデザインする力が育っていくのです。

園生活の中で、自分たちで遊びに必要なものを作ったり、保育者からの提案で、みんなで一緒に作ったりと、製作を始める時の状況は様々です。自分たちが作ったものを使って遊びを進めたり、自分の作品が保育室に飾られたりすることは、子どもにとって大変うれしいことです。

教育的意義

- ・ 作品が完成したときには大きな達成感や成就感が得られるとともに、自分の作品を遊びや生活の中で使うことを通して、仕上げた“もの”に愛着を感じ、大切にしようとする気持ちが芽生える。
- ・ 様々な製作素材に触れて、物には多様な材質や形態があることを知り、それらに適した使い方を学びながら、工夫して製作することで創造性が培われる。
- ・ 切ったり折ったり貼ったり丸めたりする作業を通して、手先の器用さが培われる。
- ・ 完成までに時間を要する作品の製作では、じっくりと取り組むことから根気が養われる。
- ・ 作りたいものや、完成した作品の使い方を考えるなかで、想像性が豊かになる。
- ・ いろいろな用具を使いながら、それらの用途や仕組み知る。
- ・ 製作の過程には手順があることや、多様な作業が必要であることを知る。
- ・ 作りたい物のイメージを教師や友達に言葉で伝えたり、相談したりしながら、教師や友達とのコミュニケーションを深めていく。
- ・ 保護者に作品の製作過程を話したり、子どもが作品を家に持ち帰ったりすることで、保育者と保護者が子どもの成長・発達の姿を共有し、具体的に捉えることができる。

製作活動の展開



保育室には、製作の素材となるもの（食品の入っていた容器、トイレトペーパーの芯、様々な空き箱など）がいつも分類しておいてあります。

子どもがひとりで扱っても危なくないものは、子どもの手の届く場所においています。

使うとき、また片付けのとき、子どもが分かるように絵と文字で表示をしています。

家庭からもってきたものを、表示を見ながら子どもが箱に入れて整理しています。

始めはワニになったつもりで遊んでいた子どもが、もっとワニらしくなりたくて、しっぽをつけることにしました。

硬い牛乳パックの紙を切ってつなげてあるので、毎日繰り返し使っても破れたりしません。

広告の紙を、折ったり切ったり丸めたりして遊びだしました。

大きさや厚さの違いを考えながら、太くしたり細くしたり、同じ広告の紙であっても、扱い方は様々です。

食品の入っていた容器とトイレットペーパーの芯を組み合わせ、紙を丸めて作ったボールにひもをつけて「けんだま」を作りました。

子ども一人では難しい部分は、教師と一緒に手伝って仕上げました。



色のきれいな落ち葉を、ペンダントの飾りとして使うことにしました。

教師が色紙に描いておいた丸や星やハートの形から好きなものを選びだし、線に沿ってはさみで切り取りました。

自分の好みの葉っぱを糊で貼って、ペンダントができました。

ある子どもが、葉っぱや木の実をビニール袋に飾りとして貼り始めました。教師はそのアイデアを受けとめて、「シャツ」にしてみることを提案しました。

それを見て、自分も「シャツ作り」に挑戦してみようとする子どもが出てきました。



「シャツ」の飾りは、たたむと取れたり、ばらばらになったりします。

教師は、本物のシャツのようにハンガーにつるしました。

やがて、「シャツ作り」はクラス全体に広がっていきました。

留意点（配慮すること）

- ・ 製作の道具・用具、素材・材料は、子どもの発達段階や時期に応じて用意し、子どもの意欲をかきたてるような提示の仕方を考えましょう。
- ・ 危険を伴う用具は、その扱い方を知らせるとともに、教師と一緒に使ったり、子どものやり方を見守ったりするなど、状況に応じて対応します。また、使用後は、子どもの手の届かない場所にすぐにしまうことが大切です。
- ・ 糊^{のり}の伸ばし方、セロテープの切り方、紙の丸め方、はさみでの曲線の切り方など、出来ない子どもには、教師が個別的にじっくりと教えていきましょう。
- ・ 素材や材料がたくさんあっても、乱雑に置かれているだけでは、子どもも使ってみようという気持ちにはなりません。製作に使用する素材・材料は、使いやすいように分類して整理しておきましょう。
- ・ イメージをどう具体化したらよいか分からないでいる子どもには、教師と一緒に素材を探したり、手伝ったり、図鑑を見ることをすすめたりして、援助していきましょう。
- ・ 新しいアイデアを取り入れたり、工夫して仕上げたりしている子どもの作品を、他の子どもたちにも知らせるなどして、学びあう機会につなげていくのもよいでしょう。
- ・ 子どもに美的感覚が養われるように、場所や空間に配慮して作品を飾りましょう。

活動の応用またはヒント

- ・ 子どもが作った作品を集めて展示し、「作品展」をして保護者にも見てもらうのも楽しいでしょう。完成した作品を一堂に飾ることで、互いの作品の違いやよさを共に味わうことができますし、作品を通して、教師・子ども・保護者間のコミュニケーションを図ることもできます。
- ・ 子どもの作品を飾る場所は、保育室だけとは限りません。園全体の中で、効果的な場所や意外性をねらった場所などを考えてみると、他のクラスの子どもたちへの刺激になったりして、製作もいっそう楽しいものになります。
- ・ 作品の作り手がその過程を振り返って言葉にしたり、他の子どもたちがそれを聞いたりしながら、あらためてその作品を見ることで、互いの創作意欲が刺激されます。
- ・ 日本の伝承遊びである「けんだま」のように、その文化固有の伝承遊びは、製作でも積極的に取り入れていきましょう。とくに、玩具が手に入りにくい地域では、自分たちで作ったおもちゃは、大好きな遊び道具になることでしょう。
- ・ 子どもが扱いやすく、危険がないものであれば、どんなものでも製作の素材となります。その国、地域ならではの製作の素材を考えてみましょう。

ダンボール

ダンボール箱は生活の身近なところにあり、幼児にも親しみがあることから、幼稚園ではしばしば製作活動や遊びの材料として活用しています。

大きな箱型で、子どもが出入りしたり、押したり引いたりしても壊れない強さと、形を自由に変えられること、動かしやすいことなどから、子どもたちはお風呂、家、船、乗り物などをイメージしながら遊びを進めていきます。大小いろいろの形を積んだり、並べたり、組み合わせたり、つなげたりして、自分がイメージしたものを作ったり、偶然にできたものを何かに見立てたりして遊びます。さらに、作ったり、壊したりする中で、新しい発想が生まれ、工夫して遊ぶ面白さを味わいながら、遊びが発展していきます。ダンボール製作は、様々な要素を含む構成的で協力的な活動です。子どもの素朴な見立てからイメージを広げて、友達と一緒に遊びを発展・展開させていくことが可能な、はば広く、奥深いものであるといえるでしょう。

教育的意義

- ・ 箱の中に入り込むことで、包み込まれる安心感を得たり、友達と一緒に入って仲間としてのつながりを感じたりすることができる。
- ・ 工夫したり、試したりしながら、ダンボールでイメージするものを作り上げていく過程で、想像力を引き出し、たくましい創造力を育てていく。
- ・ ダンボールを平らに伸ばしたり、変形させたり、立体的に構成したりすることに面白さや楽しさを感じながら、豊かな表現力を育てていく。
- ・ ダンボール遊びを通して、数量や図形の組み合わせといった構成感覚や、広さ・狭さ、高さ・低さ、明るさ・暗さなどの空間感覚を培っていく。
- ・ 友達と相談し、力を合わせながら、長時間あるいは数日間持続して、大型の製作に取り組むことで、やりとげた達成感、成就感を味わうことができる。
- ・ 製作の過程で、いろいろな材料・素材に触れ、用具や道具の使い方を知りながら、それらの利用の仕方や扱い方に慣れる。
- ・ 製作したものを使って遊ぶなかで、手・足の動かし方や大きな物・重い物の扱い方を体得し、身体全体の動かし方や、力の配分や加減の仕方を学んでいく。

ダンボール活動の展開

ダンボールにひもを通し、乗り物にしています。友達同士で、乗る人、引っ張る人を交代しながら遊んでいます。

友達を乗せて動かすには、一生懸命ひっぱらなければなりません。“力を出し切る”ということ、遊びの中で学んでいます。

ダンボールを広げて立つようにして、大きな振り子のついた時計ができました。

文字盤を作り、振り子には使い終わったセロテープの芯を使っています。

みんなでダンボールを取り囲んで描いた絵が、模様になっています。



箱をつなげて家を作りました。

「こんにちは」「いらっしゃいませ」と隣との行き来も始まります。

ダンボールの部屋に、すっぽり入って落ち着いています。

全身を包み込んでくれるダンボールの中は、心地よい居場所なのでしょう。

どうやって窓を作ったらよいか、教師に相談しています。

教師は、難しいところや、危険な用具を使うときは手伝いますが、子どもたちがそれぞれのイメージを生かしながら、できるだけ自分たちで作業を進めていけるように、助言やヒントを与えていきます。

家の中に台を作って電話を置いたり、棚をつけたりして、部屋らしく整えていきます。

友達も、外から家の中をながめて、アイデアを出してくれます。

つなげたダンボールは、友達と一緒に乗る大きな船になりました。

押したり引いたりしながら、廊下の海を航海していくには、船をもっと丈夫にしなければなりません。

頑丈なダンボールを持ってきて、船を強くする相談が始まりました。

留意点（配慮すること）

- ・ダンボールを集めたら、たたんでしまっておき、いつでも取り出せるようにしておきましょう。
- ・ゆとりをもって活動できるようにスペースを大きく取り、安全に配慮します。室内の見通しや、材料・用具の置き場所に気をつけましょう。
- ・子どもが使う材料・素材は、必要や要求に応じてすぐ出せるように、あらかじめ選んでおきましょう。
- ・ダンボール用ノコギリやハサミ、キリの扱い方に目を配って危険のないようにします。
- ・ダンボールで作ったものと一緒に、ままごと道具、人形、絵本などの遊具を使って自由に遊べるようにします。
- ・みんなで一つのものを作るとき、お互いの考えを伝え合いながら、友達とのつながりを広めたり、深めたりできるように教師は援助していきましょう。
- ・ダンボールの性質上、子どもには扱いが難しい場合もあります。出来る限り子どもに任せることも大切ですが、子どもからの要請に応じて、教師はいつでも適切な援助が出来るようにしておきましょう。
- ・壊れたところの修理や遊んだ後の片付けは、子どもと教師が力をあわせて取り組みます。

活動の応用またはヒント

- ・ダンボールを箱として使用するだけでなく、切り開いて板状にしたものを、文字板、掲示板に利用したり、数字カードやペープサートなどを作ったりして遊びに利用することもできます。
- ・ダンボール箱に紙を貼ったり、模様をつけたりしながら、子どもと一緒にゴミ箱を作ることできます。ゴミを始末することについての意味を知らせながら、身の回りをきれいにする習慣を身につけることに役立てていきます。
- ・ダンボール箱をつぶして中に入り、這って前進しながら動いていくことで、身体全体を使う遊び道具としてのキャタピラになります。
- ・中に入れる遊具・用具の絵や文字を、ダンボール箱に貼っておき、整理や片付けに役立てます。
- ・ダンボール箱をつなげたり、積み上げたりして、飾り台や机として家具のようにしたり、人形劇の舞台や運動会の門などを作ることできます。
- ・製作や遊びが1日で終わらない場合は、次の日に続けていくのもよいでしょう。また、迷路、遊園地、お化け屋敷など、他のクラスの子どもを誘いながら、何日もかけて取り組む活動を楽しむことができます。